
蕭紅の短編小説「手」について

吉川 榮一

1. はじめに

中国現代文学を代表する女性作家の一人である蕭紅は、辛亥革命の起きた1911年に生まれ、日中戦争さなかの1942年1月にわずか31歳の生涯を閉じている。親子の情愛に欠けた家庭に生まれ育ち、数人の男性と余り幸せであったとは言えない恋愛を紡いだ後、戦時下の香港で誤診されたあげく病死した蕭紅は、常に悲劇的な色彩を伴って語られ、事実その作品群もまた暗い影を宿したものが少なくない。代表作として取り上げられることの多い中編小説『生死場』や『呼蘭河伝』においても、時代や社会慣習に翻弄され蹂躪される人々の救いのない姿が描写されている。しかし、悲劇的な生涯であったからといって、彼女の作品全てを彼女の人生の投影としてのみ読み取ってよいわけではあるまい。

拙稿が取り上げる蕭紅の短編小説「手」は、蕭紅の代表作の一つと言い得る作品である。そのことは、蕭紅死後の本作品の扱いを見れば明らかである。たとえば次のような例がある。蕭紅が世を去って百日ほどしか経っていない1942年5月1日、中国共産党の根拠地が当時置かれていた延安で蕭紅追悼会が開催された。この追悼会を主催したのは、前の夫だった蕭軍や生前の蕭紅と交流のあった丁玲が発起人に名を連ねる文芸団体・文芸月会である。文芸月会はその後、会報誌『文芸月報』第15期を「蕭紅紀念特集号」として刊行したが（1942年6月15日）、この「蕭紅紀念特集号」に、蕭紅の友人の追悼文とともに掲載されたのが「手」であった。¹⁾ すなわち、蕭紅の死後、蕭紅とゆかりの深い人々が蕭紅を代表する短編小説として「手」を選んでいるのである。

さらに、それから五年後の1947年5月、『東北文芸』は東北地方出身の作家・蕭紅の逝去5周年を記念して、蕭軍の解説「『手』について（「關於『手』」）」を付して、またも「手」を掲載している。²⁾

実のところ、蕭紅自身もこの作品に自信を持っていた。静養を兼ねて日本に短期の語学留学をしていた1936年の冬、彼女の作品をほかの作家たちの作品とともにロシア語に翻訳して出版したいという申し出があり、夫・蕭軍からどの作品を選ぶべき

か手紙で問い合わせがあった際、彼女はほかの2作品とともに「手」を提案している。手元に何の資料もないなか、尋ねられて即座に題名を上げられるほど、彼女はこの作品に愛着と自信を持っていたのである。³⁾

日本においても、蕭紅存命中の1940年に長野賢氏が「手」の日本語訳を『中国文学月報』58号に発表して以来、岡崎俊夫氏や平石淑子氏など複数の翻訳者によって日本人読者に紹介されている。⁴⁾

このように、多くの人が蕭紅の代表作として認め、広く紹介されてきているにもかかわらず⁵⁾、蕭紅がいかなる意図でこの作品を著したのかについて詳しく論じられてきたとは言いがたい。単に詳しく論じられていないだけではなく、誤って理解され紹介されているのではないかとさえ思われてならない。前述した「『手』について」を執筆した蕭軍は、蕭紅が本作品を執筆した際にはまだ配偶者と言える立場にあった人物である。1930年代を代表する作家でもあるこの蕭軍は、蕭紅逝去後三ヶ月あまり後の1942年5月3日の日付をもつ「『手』について」の中で次のように記している。

一 題名

人と人との違い、この小さな悲劇の形成は、その大部分は全てその「手」のせいであり、その手の形や色は、「奴隷のしるし」と言うべきである。

二 ものがたり

一人の染物屋の娘が学校に入り、自分の力量を超越し、自分の階級を抜け出そうとしたが、結局——失敗してしまった。⁶⁾

家業の染物屋の手伝いをしていた主人公の少女は、手が青黒く染まってしまっているために同級生や教師から侮られ、勉強にも付いていけず結局は女学校を去らざるを得なくなる……というあらすじだけを追えば、蕭軍のように「悲劇」だの「失敗」だのと言った言葉でこの作品を括って、それで理解したつもりになってしまうかもしれない。現に中国のインターネット上で「手」をチェックすると、「痛苦」「悲惨」「悲劇」などという言葉がこの作品のキーワードでもあるかのように飛び交っている。

蕭軍の「『手』について」が発表されてから半世紀近くを経ても、蕭紅ゆかりの香港生まれのある女性研究者は、「手」を論じて次のように記している。

貧しい中国家庭出身の少女が近代的な教育を手に入れるために受けた試練についての小説である『手』によって作り出された支配的な印象は、抑圧の気密な構造という印象である。……中略……外面的にも内面的にも、王亜明は犠牲者となっている。……中略……この小説の持つ無情さ、残酷さは、我々が幻想と呼ぼうとしているものにまったく入り込む余地を残していないように見える。⁷⁾

チョウ氏は、教師や同級生から継続的にいじめを受ける疎外された状況に置かれた犠牲者の悲劇としてしかこの作品を捉えておらず、この作品の隠れた主題である「希

望」や「明るい未来」を全く見落としてしまっている。結論を先回りして言えば、蕭軍流の理解であれチョウ氏の理解であれ、悲惨な運命に踏みにじられた哀れな少女の物語というような従来の作品理解は全くの誤りであり、短編小説「手」は希望をうちに秘め未来を見つめた、蕭紅の祈りの文学なのである。なぜそう言っているのか？ そのことを次節以降で解き明かしていきたいと思う。

2. ひかり

まず、主人公である王亜明が現れる場面に着目して、作品のあらすじを追ってみたい。なお、下線部分は要約ではなく、中国語本文から直接訳出した部分である。⁸⁾

青黒い手を持つ王亜明は、女学校の同級生たちの好奇の目にさらされながら必死に勉強に付いていこうとしていた。夜は明かりのともるトイレで本を読み、夜明け近くには階段口に座って勉強するという具合で、少しでも光のある場所であれば、「私」はいつも彼女を見かけた。日曜日の冬の早朝にも一人教科書を広げる王亜明の姿があり、隅っこの、少しでも明かりのあるところであれば、私はいつも彼女を見かけた。

春が来て、校長は王亜明の黒い手が学校の周囲を散歩する外国人の目に触れることを嫌って、彼女に朝の体操に参加させない。そればかりか、外部からの学校見学がある日には、彼女が人目に触れないように言いつけ、王亜明は涙に暮れる。

夏休みが明け、王亜明はまた手を黒くして学校に戻ってくる。しかし、ほかの寄宿生は王亜明を不潔がって同室を拒み、日本帰りの舎監も王を受け入れようとしないため、彼女は廊下の長椅子で寝ることになる。ある日、「私」は愛読していた『ジャングル』を王亜明に貸し、数日後の月の晩、『ジャングル』を返しに来た王亜明は「私」に、『ジャングル』の登場人物と同じように医者に診察を断られた経験や染物屋を生業とする貧しい家の暮らしを語る。

冬休みを前にして、校長は進級の見込みのない彼女を学校から追い出すことに決める。晴れた冬の早朝、迎えにやってきた父親とともに駅に向かって歩き出した王亜明。

朝日に照らされ長々と伸びた影は、人の前を跳ね上がりながら先に木の柵の門を這い上がった。窓から見ていると、人も影と同じようにふわふわして、彼らの姿が見えるだけで、彼らからは何の音も聞こえてこなかった。

門を出ると、彼らは遠くに向かって、朝日にあふれた方向に向かって歩いていった。雪の大地は砕けたガラスのように、遠くへ向かえば向かうほどそのまばゆい光は強くなった。私は私の眼が痛くなるまでずっとその遙かな雪の大地を見つめていた。

以上のあらすじからわかるとおり、王亜明は常に“ひかり”とともに描写されている。もとよりそれは、向学心にあふれた彼女が本を読むために明るい場所を求めていたためではあるが、蕭紅はことさらに主人公・王亜明を“ひかり”と結びつけて登場させているのである。

そもそも主人公の名前が、王亜明であることに注目せねばならない。亜明の「亜」

は「亜細亜」の「亜」であり、「明」は言うまでもなく「光明」である⁹⁾。面会に来た主人公の父親が「明子」「明子」と何度も呼びかける言葉を作者が書き込んでいるのも一つの伏線であると言えよう。

苗字の「王」は中国人に多い苗字であるが、「王」の中国語音の wang は、希望の「望 wang」、あるいは「～の方へ、～に向かって」を意味する「往 wang」に通じる。すなわち、「王亜明」とは、「アジアの夜明けを待ち望む」あるいは「アジアの明るい未来に向かって」という含意を有した命名にほかならない。あるいは、「王」の字義どおりに「アジアの曙のリーダー」と解してもよいかもしれない。

よく知られているように、蕭紅と蕭軍がこれらのペンネームを使い始めたのは、蕭紅の「紅」と蕭軍の「軍」を合わせると「紅軍」すなわち中国共産党の軍隊を意味する紅軍になるからである。彼らにとって名前は単なる符号ではなく、しばしばメッセージを伝えるためのものでもあった。本作品の主人公の名前にもし何の含意もないのであれば、蕭紅はほかの多くの作品と同じように含意を勘ぐられる余地のない名前を設定していたはずである。本作品中の他の登場人物たちである校長や舎監や用務員などには名前を与えておらず、王亜明という名前のみが繰り返されていることも指摘しておきたい。

では、蕭紅にとって、「アジアの夜明け」なり「アジアの明るい未来」などという言葉が意味していたものは何であったのか。1932年の満洲国成立とともに、蕭紅の住んでいた中国東北地方は中国ではなくなった。「亡国の民」となり、追われるように哈爾濱を離れて上海に流浪してきた蕭紅にとって、「アジアの夜明け」や「アジアの明るい未来」が意味するところは、言うまでもなく、中国東北地方からの日本軍の撤退であり、祖国中国による国土の回復である。中国の光り輝く未来である。自分のふるさとである中国東北地方に大手を振って帰ることのできるその日こそ、蕭紅にとって「アジアの夜明け」や「アジアの明るい未来」と言えるのである。そんな名前を託した主人公を、惨めな敗北者に終わらせるはずがない。蕭紅は決して王亜明を単なる挫折した悲劇のヒロインなどにはしていないのだ。そのことは、上記あらすじの結末部分と、その直前の王亜明の言葉から明らかなのである。

まず、王亜明の最後のつぶやきに耳を傾けてみよう。校長の命で退学を余儀なくされた彼女は、学校を去る直前、誰に言うでもなくこうつぶやく。

“また来るべ、本さ家^{うち}へ持^{けえ}って帰ってよくよく勉強してからまた来るべ。”¹⁰⁾

彼女は挫折してはいない。彼女にとってみれば、言わば第1ラウンドが終わっただけである。そして彼女の挑戦が希望に満ちたものであることを、台詞ではなく情景描写を通して蕭紅は強く訴えかけている。それがこの小説の結末部分である。蕭紅は、作品の舞台として利用した、自身が通っていた女学校の実際の位置関係を無視し、ある意図を込め敢えて作為的に描いている。そこからは、王亜明に寄せる蕭紅の強い思いが伝わってくる。

具体的に見てみよう。

早朝、学校の建物を出て駅まで歩いて行く父と娘の長い影がすうーと伸び、二人より先に門を這い上っていくと蕭紅はまず描写する。長い影が登場人物たちを先導するかのよう真っ白な雪の大地を伸びていく、なかなか巧みな表現と言える。この描写からわかるのは、太陽が東の地平線近くにあり、王亜明親子は門のある西に向かって歩いているということである。そうでなければ、二人の影が先に門に到達することはあり得ない。そして、蕭紅の分身である「私」はそんな二人の姿を建物の窓からじっと見ている。このような状況設定である以上、この前後の描写に語り手の視点の移動はないはずである。だとすると、いささか奇妙なことが起こる。門を出た二人はどこに向かうのか？ 原文はこうである。

向着迷漫着朝陽的方向走去。

取えて硬く直訳すれば、「朝の光があふれている方向に向かって歩いていく」となるであろう。蕭紅は、本作品の別の箇所でも、甘い空気があふれていると描写する際に「迷漫」という語を使っているし、『生死場』中の、家の中に蚊がいっぱいにあふれる場面でも、この「迷漫」という語を使っていることからして¹¹⁾、「迷漫着」を「いっぱいにあふれている」と理解して間違いないように思う。二人を見続けていた「私」の眼が痛くなる（「刺痛了我的眼睛」）という表現からも、まぶしい方向に向かって二人は歩いて行ったと考えて間違いあるまい。¹²⁾だとすれば、そのとき王亜明親子が向かっていたのは、日の出の方向すなわち東に向かっていたと言うことになる。描写のままを信じれば、朝日を背中に受けて歩いていた王亜明親子は、学校の門を出たとたん180度方向を変え朝日に向かって歩き出している。

多くの蕭紅研究者は、蕭紅の小説が彼女の実体験に根ざした散文ではないかと考えている節がある。例えば、我が国における蕭紅研究の先達である尾坂徳司氏は、名著『蕭紅伝』のなかで、「蕭紅はこの女子中時代の事件をもとにして短編『手』を書いた」と書き（同書103頁）、あたかも事実として王亜明のような学生がいて、彼女との交流をもとにして淡々と描いた作品であると言わんばかりである。また、中国においても、代表的な蕭紅研究者である李重華氏は、これまで小説として扱われてきた「手」を含む多くの蕭紅作品は、散文として扱われるべきだと主張している¹³⁾。蕭紅作品の多くを回想的散文と読むそうした立場からすれば、門が敷地の西側にあるため敷地内では西に向かい、駅に行くには学校を出てすぐ反転しなければならない作りになっていたにちがいないと判断し、180度の転換は単なる事実の描写だとする反論があるかもしれない。

しかし、この作品が事実即して書かれたものという思い込みからまず自由にならねばならない。なぜなら、もしこの作品が蕭紅の在籍していた女子第一中学時代の出来事をもとにして忠実に描いたものであるとするなら、ここでいう「駅」は哈爾濱駅ということになるが、哈爾濱駅は学校の東側にはない。哈爾濱駅は女子第一中学のほぼ真北にあり、駅に行きたくれば、東ではなく北に向かって歩いて行かねばならないのだ¹⁴⁾。しかし、蕭紅は彼らを東に向かわせた。それはなぜなのか。

働き者の父を持ち、自らも文字通り手を汚して家業を手伝う健気な少女に、希望を与えなかったからである。はたらく黒い手に希望を託したかったのである。たとえ事実を曲げて、日の沈む方向——これから暗黒を迎える西方に二人を歩ませるわけにはいかなかったし、希望や明るい未来を連想させない寒々とした北方へ歩ませるわけにはいかなかった。それはおそらく、王亜明のうえに蕭紅自身の未来の希望を重ねたかったからでもあろうが、たとえ今はどれほど苦しくても、貧しい労働者の未来にこそ希望があるというテーマを秘めて、蕭紅が創作に臨んだからである。蕭紅が「手」を単なる回想的散文ではなく「創作」として執筆したことについては、作中に二度登場する『ジャングル』の持つ意味を理解することでより一層はつきりとしてくる。

3、『ジャングル』

『ジャングル』は、アメリカの小説家アプトン・シンクレア（Upton Sinclair：1878～1968）が、1905年に社会主義新聞『理性への訴え』に連載し、翌年単行本として刊行されたベストセラー小説である。アメリカ第二の都市シカゴの食肉工場で過酷な労働を強いられたリトアニア移民たちの悲惨な生活と食肉工場の実態を詳細に描いたこの小説では、主人公の青年とその周囲の人々は次々に不幸に見舞われ、主人公自身も自堕落な生活に一度は身を落とすが、やがて社会主義の宣伝と出会い未来に希望を抱く。小説は、アメリカの将来は労働者にかかっているのだと声高らかに主張する演説者の姿を力強く描写した場面で終わる。もっとも、蕭紅が読んだ『ジャングル』中国語訳である『屠場』は、ニューヨークのVanguard Pressが1927年10月に出版した第三版に基づいて訳出されているため、30章と31章は削られ、全29章の構成となっている¹⁵⁾。

この小説に描かれているのは酸鼻をさわめる食肉工場労働者の実態や貧困にさいなまれたすえに命を落とす移民一家の悲惨、正義感の強かった女性が生き延びていくために娼婦に身を落とす苦しみ等々、悲劇的なことばかりである。全31章版では、31章中28章まで、蕭紅が手にした中国語版では全29章中28章までは、これでもかこれでもかと言わんばかりに主人公たちは不幸と社会的重圧に苦しめられ続けている。にもかかわらず、『ジャングル』は多くの読者から、抑圧されてきた労働者が苦難の末に再起する希望の書として読まれてきたのである。シンクレア研究者の中田幸子氏は、日本におけるシンクレアを受容を次のように評しているが、それは中国においても同じではなかったろうか。

大体において日本では、この作品は著者の意図通り、「抑圧されたヒーローとしての労働者」への同情や共感などを呼び起こし、精神的にあるいは情緒的に訴えるものとして、しっかり受け止められた。¹⁶⁾

アメリカにおいては、食品管理の杜撰さを暴く暴露小説的観点から取りざたされることの多かった『ジャングル』であるが、日本においては抑圧された労働者への共感

を呼び起こす小説として、社会主義の伝道書のように受け取られたのである。1925年に『ジャングル』を日本語に翻訳し出版した前田河廣一郎は次のように記している。

これほどペンを握つた一人の人間が、痛切に文明を批判し、解剖し更に進んでプロレタリアの解放運動の一戦線を暗示した作は、世界の文学史上絶無である。¹⁷⁾

このアプトン・シンクレアが中国において知られようになったのは1920年代になってからである。魯迅もシンクレアにひそかに関心を寄せていたことは、翻訳すべき英米の書物について尋ねてきたと思われる江紹原に対して次のように書き送っていることからよくわかる。

イギリス、アメリカの作品は私はほとんど読みませんし、あまり好きでもありません。ただU.Sinclair(綴りが合っているかどうか)の文学論はきわめて斬新で、きわめて大胆だと聞いています。¹⁸⁾

魯迅がどのような経緯でアプトン・シンクレアを知るに至ったのかは不明であるが、日本においてシンクレアの小説が単行本として翻訳紹介され始めたのは、1920年代半ばのことである。

1923年1月 『スパイ』(The Spay); 堺利彦・志津野又郎訳、天佑社。

1924年8月 『赤黑白(事実物語)』(The Brass Check 部分訳); 神山宗勲訳、聚芳社。

1925年3月 『石炭王』(King Coal); 堺利彦訳、白揚社。

1925年12月 『ジャングル』(The Jungle); 前田河廣一郎訳、叢文閣。

1926年7月 『底に動く一炭鉱ストライキの写実一』(『石炭王』の改題)、白揚社。

1926年11月 『義人ジミー』(Jimmie Higgins); 前田河廣一郎訳、改造社。

1927年3月 『人は何故貧乏するか』(Letters to Judd); 小池四郎訳、春秋社。

1927年10月 『拜金芸術』(Mammonart 部分訳); 木村生死訳、金星堂。¹⁹⁾

魯迅が上の手紙を書いた1927年11月以前、日本では上述のような翻訳状況にあり、1928年以降は更に熱を帯びてシンクレアの翻訳紹介が続くのである。1927年段階では、魯迅ですらあまりよく知らなかったシンクレアだったが、日本のシンクレア熱がそのまま伝染したかのように、その後の中国で一躍脚光を浴びる。2年後の1929年12月20日の日付のある魯迅の「我和《語絲》的始終」には次のような記述が出現する。

あの頃のアナトール・フランス、H.G. ウェルズ、バーナード・ショーは中国では大いに威力があり、文学青年を驚嘆させるに足る名前でしたが、それはちょうど今年のシンクレアと同じです。²⁰⁾

1929年の中国文壇には一大シンクレアブームが起こっていたのである。雑誌における翻訳紹介は別にして、小説の単行本だけに絞っても、次のような出版状況であった。

3月 『石炭王』再版 (King Coal)、易坎人 (= 郭沫若) 訳、上海 楽群書店。

5月 『石炭王』第三版、上海 楽群書店。

6月 『錢魔』(原題不明)、林徽音 訳、上海 水沫書店。

8月 『屠場』(The Jungle)、易坎人 (= 郭沫若) 訳、上海 南強書局。

11月 『工人傑麦』(Jimmie Higgins)、黄藥眠訳、啓智書局。²¹⁾

アプトン・シンクレアの作品が当時の中国文壇に与えた影響については、今日まだ十分に解明されていない。しかし、竹内好氏が茅盾の長編小説『子夜』について紹介する中で、「アプトン・シンクレアの影響もあるのではないかと思う。シンクレアは三〇年代の中国では日本以上に読まれた」と書いているように²²⁾、シンクレアの作品は中国でも人々に愛読され、多くの文学青年に影響を与えたに相違ない。

さて、*The Jungle* の中国語訳である『屠場』は『石炭王』と並んで大変な売れ行きであり、1930年2月に再版が、同年5月に第三版が発行され、発行部数は一万部に達したという。この『屠場』を蕭紅は愛読していた。女学校に在籍していた18歳の頃を苦い思いで振り返った「一九二九年の愚昧(一九二九年底愚昧)」に、彼女は次のように書いている。

あのころ私はシンクレアの『ジャングル』を読んでいた。もともと非常に思い悩んでいたので、この小説に対して120パーセントの熱情を傾けて読み進めていた。あの明るいガラス窓の下で読んでいた。²³⁾

このような記述があり、しかも小説「手」の中の「私」が「蕭」という苗字に設定されているため、本作品がともすれば回想的散文と受け取られてしまうのも無理からぬことではある。しかし、「手」における『ジャングル』への言及は、本作品が単なる回想的散文ではないことを読者に示すために蕭紅が引いてくれた言わば一種の補助線なのである。

「手」を執筆したとされる1936年の春、蕭紅はその生涯で最も安定していると言っても過言ではないような生活環境にあった。哈爾濱から大連、青島と流浪を続けてきた蕭紅と蕭軍は、一面識もなかった魯迅に手紙を送ったすえに、魯迅を頼って1934年11月初めに上海に辿り着いた。同年11月30日に初めて魯迅と対面するや、魯迅から好意的に遇されるようになる。その後、魯迅の庇護のもとで作品を発表しはじめ、1935年末には出世作の『生死場』も出版することができた。夫・蕭軍との関係は少しぐしゃくし始めていたものの、印税のおかげでまずまずの生活を維持できるようになり、私生活では恰も父親を慕うがごとく頻繁に魯迅の自宅を訪問して心の平安を保

つこともできるようになった。

実の父親と反りが合わず19歳で家を飛び出し、21歳で頼みの同棲相手に捨てられ、未払いの宿代を精算するために妓楼に売られかねない危機を救ってくれた蕭軍と食うや食わずの貧乏暮らしを2年近く続けていた蕭紅が、やっと手に入れた束の間の安定が彼女の上海時代なのである。彼女は、新進気鋭の女性左翼作家として今まさに上海で羽ばたこうとしていた。そんな彼女が、シンクレアの『ジャングル』を愛読していた女学校時代を背景に、貧しい暮らしの中で家族の期待を一身に背負い懸命に努力する田舎娘を描いた作品が「手」である。左翼文壇の一員であることを自覚していた蕭紅は、当時の多くの日本人と同様にシンクレアをプロレタリア作家として認識していたはずである。そんな彼女が単なる悲話として「手」を創作したとは考えがたい。

『ジャングル』の日本語訳が世に出た際、山田清三郎は、「(『ジャングル』は)自分のなかに一つの根強い意志の力を植え付けてくれた」という言葉を残している²⁴⁾。また、小野十三郎は「労働者ヨウリス—『ジャングル』から—」と題する詩の中で、次のように詠っている。

プロレタリアのヨウリス
夢見る力を持つたお前
憤怒と^{アツ}拱笑をおぼえたお前
階級を認識した闘士
闘ふことを知るお前
意気揚々と帰来せよ²⁵⁾

日本の読者たちは、『ジャングル』から、強い意志の力や夢見る力、闘う力を読み取っている。事情はおそらく蕭紅についても同じであったに違いない。すなわち、貧しさゆえに周囲からの蔑みや嘲弄を受けながらも決して挫けず、粘り強く自分の人生を切り開いていく少女にこそ未来の希望があるのだと、蕭紅は「手」を通して訴えたかったのである。

4. むすび ——表題「手」の意味するもの

作品冒頭、王亜明の手は次のように描写される。

私たちの友達の中で、これまでこんな手は見たことがない。青く、黒く、また紫のようでもある。爪から手首の上までずっと色が変わっている。

彼女がやってきて数日すると、私たちは彼女を「変な人」と呼んだ。放課後、みんな床を駆け回っていても決まって彼女を取り囲んでいた。でも彼女の手について、誰一人として尋ねたことはなかった。²⁶⁾

肉体労働をしたことのない同級生たちから見れば、染料で青黒くなった王亜明の手

は好奇の対象であるだけで、物珍しさに集まって見に来るものの、誰もその理由を知ろうともしない。言うまでもなく、彼女たちの手は皆真っ白である²⁷⁾。また、彼女の青黒い手を忌み嫌う女校長の手は「血の気のない化石のように透明な指」をしていると描写され²⁸⁾、王亜明の青黒い手と対照的に描かれている。手は、その人物が肉体労働をしているか否かを一目で伝える目印と言ってよい。蕭軍は「奴隷のしるし」などと書いているが、蕭紅にとって手は未来を切り開いていく労働者のシンボルなのである。

さて、作品の舞台は、蕭紅の出身校「東省特別区立女子第一中学」であるとされている。同校は哈爾濱の中心市街地にあり、周囲にロシア建築が立ち並ぶエキゾチックな場所にあった。当時の哈爾濱は、「東洋のパリ」と呼ばれ、上海とならぶ国際都市だった。それゆえ同級生たちは、蕭紅のような地方の地主の娘や地元哈爾濱の商人や官吏の娘など、それなりに豊かな階層の娘たちがほとんどだったはずである。現に蕭紅の同級生の一人である劉俊民氏は往事を振り返って、クラスにはアメリカのシティ・バンクの行員の娘や政府高官の娘もいたことを証言している。しかも劉氏によれば、初め40人前後いた同級生が、「往々にして卒業を待たずに結婚することになったため、卒業時にはわずか20人あまりしかいなかった」という²⁹⁾。良縁があれば学校をやめていくような良家の子女たちが多かったことを窺わせる証言と言える。前述のように、尾坂徳司氏は「蕭紅はこの中学時代の事件をもとにして短篇『手』を書いた」と書いているが、このような学校に貧しい染物屋の娘が入学してくるものだろうか？果たして、王亜明のモデルになった人物などいたのだろうか？蕭紅の女学校時代の同窓生の回想を見る限り、誰一人として王亜明を思わせるような人物について触れていない³⁰⁾。「王亜明」は、働く者の未来に幸あれと願う蕭紅の作り出した架空の人物であったように思われてならない。蕭紅は、女学校時代の回想的散文として「手」を書いたのではなく、『ジャングル』へのオマージュとして「手」を創作したのではないだろうか。

作品中、『ジャングル』を読み終わった王亜明が、『ジャングル』から受けた感動を作者の分身である「蕭さん」に物語る場面がある。染物屋の貧しい暮らしゆえ、母親が医者から診察を断られたことや将来自分が弟妹に勉強を教えてやろうと考えていることなどを伝える重要な場面なのだが、このとき王亜明は次のように語り始める。

マリアは、本当にこんな人がいたみていで、彼女は雪の上に倒れたけど、おらあ彼女は死んじゃいねえと思う！ 死ぬはずがねえ……³¹⁾

主人公ユルギス一行とともに移民としてアメリカにやってきたマリアが、難産で死にかかっているユルギスの妻のために奔走する場面を前提に書かれているようであるが、そもそもマリアは小説中では最後まで死なない登場人物であるから、『ジャングル』を読了してのつぶやきだとすれば、如何にも奇異である。エネルギーでたくましい女性として物語冒頭に登場するマリアは、暮らしを支えようと懸命に努力し続けるが、結局は家族の生活を支えるために娼婦に身を落とし、薬物中毒にされたため娼婦をやめることもできないまま生きていく人物である。にもかかわらず、蕭紅は、王亜

明の口を通して「死ぬはずはない」と語らせているのである。こう書いたときの蕭紅の脳裏には、すんでのところで娼婦に身を落としたかもしれなかった自身の来し方や、自分を捨てて逃げた婚約者との間に生まれた子供を誰とも知れぬ他人に渡して生きてきた自分の過去に対する苦い思いが交錯していたのではあるまいか。だからこそ逆に、自らの作品中のマリアは、絶望の淵に落ちていく人物としてではなく、決して挫けないであろう人物形象として描き出したに相違ない。

蕭紅は、『ジャングル』に描かれている、苦難の末ついに社会主義に光明を見出し立ち上がる主人公の姿に強い感銘を覚えていたのだ。日本の多くの読者がそうであったように。だからこそ彼女は、その手を見れば肉体労働をしていることが一目でわかる染物屋の娘を主人公に設定し、周囲の働かざる者からどれほど蔑みを受けようとも決して挫けることなく、最後には明るい未来に向かっていくことを暗示する物語を紡ぎだしたのである。シンクレアが一大長編小説を通して力強く訴えた、労働する者にこそ明るい未来があるという理想を、「120パーセントの熱情を傾けて」読んだ蕭紅は深い共感とともにしかと胸に刻んでいたはずである。蕭紅は、『ジャングル』に描かれた理想に対する共鳴・共感を、「手」という短編小説を書くことで表したとも言えよう。

『ジャングル』を中国語に訳出した郭沫若は「訳者後記」に次のように記している。

本書の持つ力と意義については、聡明な読者は一読してすぐおわかりのことと思う。訳者自らも一言告白すれば、私は訳述の途中、山を押しつけ海を覆さんばかりの巨大な力にほとんど圧倒されそうになった。私はこれまでこのような力強い作品を読んだことがなく、おそらく世界的にも未だかつてなかったものであろう。この作品を読むと、我々は無上の慰めと無上の励ましを感じ、敢えて自らに問う、「いったい誰がこのような大きな力を有しているのか」と。³²⁾

検閲を意識して郭沫若ははっきりと書いていないが、「聡明な読者」は、巨大な力を生み出すのは労働者なのだという主張をしっかりと受け止めたはずである。郭沫若訳の『ジャングル』は、主人公ユルギスが社会主義に目覚め、興奮を抑えられないでいる次の場面で作品の幕を閉じている。

他沈酔在那種燦爛的未來的榮光中，看見培京頓的民衆進軍，把「屠場」奪到手裏了！（彼はあの燦然たる未來の榮光に酔い痴れながら、パッキングタウンの民衆が進軍し、ユニオン・ストックヤードをその手に奪い取る姿を目に浮かべていた）³³⁾

蕭紅の短編小説「手」は、労働者の明るい未来を予感させるシンクレアの『ジャングル』に対する、蕭紅の「返し歌」ともいうべき作品なのである。

注

- 1) 平石淑子『蕭紅研究——その生涯と作品世界』、7頁、汲古書院、2008年。
- 2) 暁川「蕭軍逸文「關於『手』」的發現及解讀」；《新文学史料》2011年第2期、人民文学出版社、2011年5月22日。
- 3) 蕭紅の蕭軍あて1936年12月5日付け書簡。蕭軍『為了愛的緣故——蕭紅書簡輯存注釋録』、145頁、金城出版社、2011年。
- 4) 岡崎俊夫訳は、『現代中国文学全集』第十四卷（河出書房、1955年）及び『現代中国文学』11（河出書房新社、1971年）、平石淑子訳は、『中国現代文学珠玉選 小説3』（二玄社、2001年）に収録されている。
- 5) 平石淑子『蕭紅作品及び関係資料目録』（汲古書院、2003年）によれば、中国において編まれた蕭紅の選集の類いには必ずと言ってよいほど「手」が収録されている。（18頁）
- 6) 前掲、暁川「蕭軍逸文「關於『手』」的發現及解讀」；《新文学史料》2011年第2期、39頁。
- 7) レイ・チョウ『女性と中国のモダニティ』、240～245頁、田村加代子訳、みすず書房、2003年。
- 8) 底本として、『蕭紅全集』（編集委員会主任：衣俊卿、全四巻、黒竜江大学出版社、2011年）を使用した。
- 9) 尾坂徳司氏も『蕭紅伝』において、「中国の将来はその汚い手をした労働者の上にある、と蕭紅は主張したかった。だから彼女はヒロインの名を亜明（アジアの曙）とつけた」と書いている。『蕭紅伝』、103頁、燎原書店、1983年。
- 10) 「再来、把書回家好好讀讀再来。」、『蕭紅全集』第一巻、309頁。
- 11) 「手」：「帶着糖質的空氣迷漫着」、『蕭紅全集』第一巻、301頁。『生死場』：「蚊子從河邊的草叢出發，嗡嗡喧鬧的陣伍，迷漫着每个家庭。」、『蕭紅全集』第一巻、93頁。
- 12) 論者自身が早朝試してみたところでは、朝日が昇って間もない時間に、西の方をいくら見つめていても眼が痛くなることはなかった。まぶしくて目が開けていられないのは、朝日が昇ってくる方角を見たときであった。
- 13) 平石『蕭紅研究——その生涯と作品世界』、69頁。
- 14) 前注、平石『蕭紅研究』60頁所掲の「哈爾濱市街圖」による。ちなみに、平石氏も「蕭紅と哈爾濱」において、次のように書いている。「ところで、王亜明と父親は駅に向かって行くのだが、地図で見るとおり哈爾濱駅は中学の北にあり、朝日に向かって行けば駅から遠ざかることになってしまう。作者がここで事実の手を加えたのは、一旦は夢破れた王亜明に希望を失わせまいとしたためだろうか。」：平石淑子「蕭紅と哈爾濱」、西原和海・川俣優編『満洲国の文化——中国東北のひとつの時代』、193頁、せらび書房、2005年。
- 15) 原作 The Jungle については、DOVER PUBLICATION, INC. Mineola, New York, 2001を参照した。なお、日本語版『ジャングル』及びアプトン・シンクレアについては、主として以下の書籍を参照した。大井浩二訳『ジャングル』（松柏社、2009年）、中田幸子『父祖たちの神々——ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアと日本人』（国書刊行会、1991年）、同『アプトン・シンクレア 旗印は社会正義』国書刊行会、1996年）。中国語版は、易坎人（郭沫若）訳『屠場』（上海 南強書局、1929年初版）の1930年5月15日発行の第三版を使用した。
- 16) 前注、中田幸子『父祖たちの神々』、195頁。
- 17) 前田河廣一郎「『ジャングル』譯者序」、叢文閣、1925年。なお、前田河はこの「譯者序」の結びで、シンクレアを「アメリカ切つてのコミニストである」と紹介している。
- 18) 魯迅の江紹原あて書簡、1927年11月20日、『魯迅全集』第十二巻、91頁、人民文学出版社、2005年。
- 19) 中田幸子「ジャック・ロンドンおよびアプトン・シンクレア邦訳作品年代順一覧」による。前掲『父祖たちの神々』、398～399頁。
- 20) 魯迅「我和《語絲》的始終」、『魯迅全集』第四巻、169頁。
- 21) 北塔「魯迅与厄普頓・辛克莱」；《上海魯迅研究》2011年春号、170頁。上海社会科学院出版社、2010年12月。
- 22) 竹内好「『夜明け前』解説」、『中国現代文学全集』第四巻、397頁、平凡社、1963年。
- 23) 1937年12月13日執筆、原載：1937年12月16日《七月》半月刊第一集第5期。『蕭紅全集』第四巻、

184頁。

なお、蕭紅とアプトン・シンクレアとの関わりは『ジャングル』だけではない。蕭紅も参加していた「星星劇団」は、1933年頃アプトン・シンクレアの戯曲「2階の男」(The Second-story Man)の上演を目指して稽古を重ねていた。

- 24) 山田清三郎「『薄明のもとに』と『ジャングル』」、原載：『文藝戦線』1926年4月号、前掲『父祖たちの神々』、194頁所引による。
- 25) 小野十三郎「労働者ヨウリス——『ジャングル』から——」、原載：『解放』1927年5月メーデー号。前掲『父祖たちの神々』、197頁所引による。
- 26) 『蕭紅全集』第一巻、298頁。
- 27) 「早操的時候、操場上豎起来的幾百条手臂都是白的」；『蕭紅全集』第一巻、301頁。
- 28) 「貧血的和化石一般透明的手指」；『蕭紅全集』第一巻、301頁。
- 29) 劉俊民 講述、何宏 整理「我的同学蕭紅」、原載：『蕭紅研究』第一輯、1993年。『蕭紅研究七十年』上巻所収、309頁、北方文藝出版社、2011年。
- 30) 李丹・応守岩「蕭紅知友憶蕭紅——初訪徐微同志」、原載『東北現代文学史料』第五輯、1982年。丁言昭「蕭紅的朋友和同学——訪陳涓和楊範同志」、原載『東北現代文学史料』第二輯、1980年。劉俊民 講述、何宏 整理「我的同学蕭紅」、原載『蕭紅研究』第一輯、1993年など。いずれも『蕭紅研究七十年』上巻所収、北方文藝出版社、2011年。
- 31) 「馬利亞，真像有這箇人一樣，她倒在雪地上，我想她没有死吧！她不会死吧……」；『蕭紅全集』第一巻、308頁。
- 32) 易坎人(郭沫若)「譯後」、前掲『屠場』、406頁。
- 33) 『屠場』、402～403頁。